

タ暮れ ゾンビーズ

10 SHORT STORIES
DANGLING ZOMBIES

Kane Takidaira

滝平加根



暮れ ゾンビーズ



滝平加根

ヤング・アダルト文庫 6
夕暮れゾンビーズ

一九九三年三月三十一日 第一刷発行

著 者 滝平加根

発行者 小西正保

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一・九一二 下 112

電話 ○三・三八一二・九一三一(営業)
○三・三八一三・五五二六(編集)

振替 東京七一九六八二二

印刷 三美印刷株式会社

製本 株式会社若林製本工場

NDC 913 落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

© 1993 Kane Takidaira

ISBN 4-265-05206-1

Published by IWASAKI SHOTEN, Tokyo

Printed in Japan

も
く
じ

二月十四日の誰かさん 5

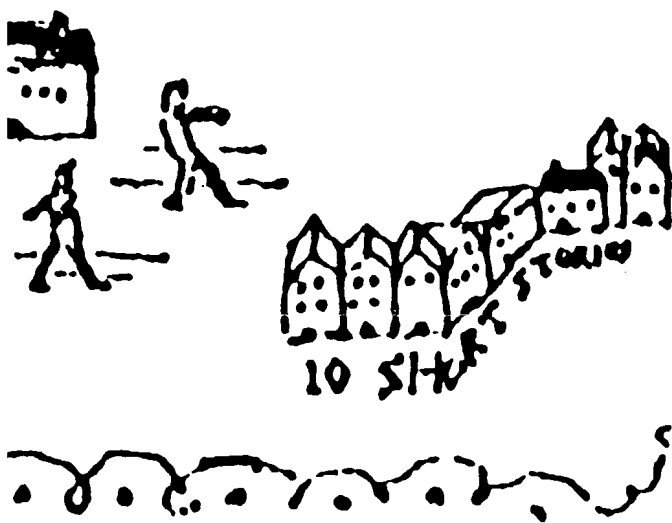
ドルトムント・カフェ午後三時 21

幼なじみ通信 41

砂漠の狸 59

事件の結末 77

芝生にころがせ!! 93



乳離れ 121

黄色いエンピツ 139

偉大なお嬢さんの話 155

夕暮れゾンビーズ 165

あとがき 195

表紙・さし絵 滝平加根



二月十四日の誰かさん



「ねえねえ、だれにあげるか、決めた？」

紀代にそうたずねられたとき、フミはドキッとして思わず受話器を落としそうになった。あわててコホンッからせきと空咳をひとつしてから、

「う……ん」

とだけ答えた。

「どうしたの？ 元氣ないじゃない」

「そんなことないよ」

「えへへ、私ねエ、決めたんだア。チヨコも買っちゃったし」

「へえ……そう」

フミはプッシュホンのボタンをコトコト指でなぞりながら、

誰にあげるの——？

と、きくのを一瞬ためらった。

紀代の声の調子からしても、話したくてウズウズしている様子のはつきりとわかる。ここで、「誰に？」とたずねるのは一種の礼儀なのかもしれない。

だが、きいてしまえば紀代はフミの相手のことも根掘りねほ葉掘りはほきくだろう。わずらわし

いというよりも、フミは去年の二の舞になるのが怖かった。

あの苦々しい思い出が、テレビ・ドラマのシナリオみたいに次から次へと浮かんでくる。

ハロウィンにクリスマスといった二大イベントをすませると、フミたちの興味はいつせいに二月十四日にそがれる。なんといつても、バレンタインは学年度末最後のイベントである。

クラスが変わってしまったえば、好きな男の子に会う機会も少なくなるだろうし、運わるく卒業していく先輩に熱をあげようものなら、この機会を逃すと一生会えないかもしれない。なんとか自分の気持ちを伝えようと必死になるのも無理はなかった。

もちろん、好きな男の子にチョコレートを贈って告白するなどという風習が、お菓子メーカーの陰謀であることは誰もが知っている。

だが、女の子にとっては楽しいお祭りであることはいうまでもないし、男の子だって少なからず楽しみにしていることにまちがいはないのだ。

「私さ、沢田クンにあげようと思うんだ」

幼なじみの美加子にこう告白したのは、去年の確か一月の終わりだったと思う。北風が

ギョングン吹き荒れるなか、美加子を買ったばかりのチェックのマフラーをぐるぐるま

きにしていたのをはつきり覚えていた。

「へえ、フミって、沢田クンが好きだったの」

「好きっていうか、ただ、なんとなくね」

「ふーん……そうなんだ」

「うん——それより美加子は誰？」

「私は、はつきり決めてないけど、やっぱり村上クンかな」

「村上クンかア、バンドマンだもんなア、カッコイイよね。美加子とはお似合いだよ」

そのときは本気でそう思った。背も高いしハンサムだし、村上クンに憧れない女の子のほうが少ないと思う。村上クンのうしろ姿を見ただけで、フミなどはホウツとため息をついてしまうくらい。何度かアタックしようと思ったけれど、けっして美人ではない自分に振り向いてくれるはずもないとフミははじめからあきらめていた。

しかし、美加子はちがった。

ただでさえきれいな顔には、自分が美しいということをも十分知っている自信があふれるほどに満ちている。髪をかきあげるときのちよつとした仕ぐさは、CMに出てくるモデル

のような華やかさがあつた。

美加子に対する男の子たちの噂で、わるい評価を耳にすることはめつたになかった。性格もいたって温厚で、美人特有の近寄りがたい雰囲気などみじんも感じられなかった。

そりゃあ、＼きどつてる＼とか、＼お高くとまつてる＼とか、そういった意見をいう男の子の中にはいたけれど、だいたい美加子の気を引くためのデモンストレーションにすぎなかった。

「ねえ、フミ。沢田クンのどこが好きなの？」

「うーん、そうだなア……顔も好みだけど、でも、やっぱり優しそうなところかな。それに、特別カッコつけてないところもいいし」

「ふーん、でも、ほかにも誰かにあげるんでしょ？」

「あげないよ。義理っていうの好きじゃないもん」

「そうだよ、やっぱり好きな人にあげなくちゃ意味がないよね。一番好きな人にあげるから価値があるんだもんね」

そのとき美加子の言葉に、ひどく感動したのを覚えている。

たしかに、美人で賢い女性にコンプレックスを感じないといえば嘘になる。だが、フミ

にとつてこの幼なじみだけは別だった。いっしょに歩いているだけで美人の香りがフミにも身につくのではあるまいか、と、そう思わせる不思議な魅力が美加子にはあつた。

「そうだよ、やつぱり好きな人でなくちゃあ」

「そう、そう、年に一度だもんね」

陽が落ちるのも忘れてバレンタイン論議に花を咲かせた。幼なじみの二人は、この時点においてはハッキリと意見が一致したはずであつた。

ところが二月十四日になつてみると事態は思わぬ方向へ急転していた。

「沢田はいいよなア、こいつ、美加ちゃんから、チョコもらつたんだぜ」

フミは驚いた。長い廊下がグニヤリと曲がつて見えた。腰から下の力がスウツと抜けるような思ひだつた。

「沢田クン……美加子から、チョコ、もらつたんだ……」

「えっ？ ああ、まあな」

一瞬、迷惑めいわくそうな顔をしたけれど、沢田の表情はあきらかに喜んでいるように見えた。

——沢田クン、美加子のこと、好きなんだ……。

フミにはそう思えてならなかつた。こんな顔を見せつけられては、いまさらチョコは渡

せない。フミにだっていくらかのプライドはある。

「どうして、美加子が……？」

はじめは愚かにも人ちがいだと思った。美加子という同じ名前の後輩か、もしくは他校の生徒ではないのかと……。

しかし、人ちがいなどではないことはすぐにわかった。

「沢田クン？ ああ、チョコでしょ、あげたわよ」

美加子の口ぶりに悪びれた様子はない。フミは視線を伏せ、小声をしぼり出すようにしてたずねた。

「どうして……？」

「どうしてっていわれても——沢田クンのこと、私もいいなと思ったから」

「だって、美加子は村上クンにあげるって……」

「村上クンも好きよ。彼にもチョコあげたし、アーちゃんにもあげたし、石井先輩にもあげたし、それがどうしたの？ べつに、私が誰にチョコをあげようとフミには関係ないじゃない」

——あんまりだ——

フミは言葉にならない怒りをグツとおさえつけた。フミが沢田に恋心を抱いていることは美加子だって知っていたはずだ。それを、ただ「いいな」と思っただけで人の恋路をジャマするなんてひどすぎる。それに一番好きな人にあげなくちゃ意味がないといったのは美加子ではなかったのか。

そりゃあ、美加子ほどの美人ならば誰にあげたって振り向いてくれるだろう。何人好きになろうがそれはかまわない。だが、わざわざフミの思いを踏みにじるような真似をしなくたっていいではないか。

——裏切られた……。

もう幼なじみでも友達でもない。こんなヤツとは口もききたくない。

フミはこの美しい裏切り者をどうしても許せなかった。

考えてみれば、美加子は昔からいい加減なところがあった。チェックのマフラーだってフミがしているのを見て「いいな」と思ったから買ったんだし、Pコートだってジーンズだって「これ、いいね」といって買ってくる。

つまり、他人のものをみるとすぐにほしくなるといふ困った癖があるのだ。たしかに、どんなものでも美加子のほうが断然似合っていたけれど……。

フミはいま考えてみてもどうして美加子などに打ち明ける気になったのか、われながらもどかしかった。

あれ以来、美加子とは口をきいていないけれど、今年は誰の「相手」を横取りするつもりなのだろうか。

フミはテーブルの上に置いた銀色の包みをジッと見つめながら受話器を持つ手をかえた。金色と茶色のリボンが、シックで大人の雰囲気^{ふんいき}をだしているな、と思った。

「ねえ、フミはチョコ買ったの？」

「え……まだだよ」

「相手は？」

「ううん……ぜーんぜん」

はじめて紀代に嘘^{うそ}をついた。本当はチョコも用意したし渡す相手も決まっている。しかし、ここで軽々しく相手の名前を告げてはいけない。いちばん親しい友達に嘘をつくのは心苦しいが、それも仕方のないことだ。

——なんとか話の方向を変えなくちゃ……。

フミはなんとか話をごまかそうと、とぼけた声でたずねた。

「紀代、このあいだ買った本、おもしろかった？」

「え？ ああ『太古の神秘』のこと？ うん、すごくおもしろかったよ。フミも絶対おもしろいっていうよ」

「へえ、どんな内容だったの？」

新しく仕入れた知識を他人に披露する（ひろう）ということに不満を持つ人間は少ないだろう。

たとえばどんな受け売りにしろ、まるで自分が考え出したかのように話すときの喜びは格別のものがある。

その話に「ふーん」「すごいね」「なるほどね」などと相手がうなずいてくれればなおさらである。

「うん、それがね、昔の人間はね——」

案（あん）の定（じよう）、紀代はペラペラとまくし立てるように話し始めた。受話器の向こうで鳥がピーピー鳴いているみたい。

フミはいったん受話器（はな）を離（はな）してホウツとため息をつき、ふたたび耳に押し当てた。

——よかった、これでなんとかごまかせよう——